

西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構： 新資料の紹介

附 戦前の絵葉書に写る西新元寇防塁

伊 藤 慎 二

はじめに

前稿「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構：大学博物館北側の元寇防塁」（伊藤 2017）では、西南学院大学博物館建物北側でかつて発見された元寇防塁遺構の経緯と特徴などについて論じた。これまでの元寇防塁（石築地）調査研究史のなかで忘却されていたこの遺構は、西南学院旧本館・講堂建物（現西南学院大学博物館建物）建設に伴い、その北側隣接地で今から100年前の1920（大正9）年に偶然発見され、戦前の学院が保存整備していた。しかし、戦後すぐにその遺構の存在は忘れさられていたが、西南学院史資料センターが所蔵する当時撮影された写真の再確認を基に、前稿での検証が可能となった。

その後、学校法人西南学院常任幹事吉田雅俊氏より、同氏が入手し西南学院史資料センターに寄贈された1932（昭和7）年の西南学院中学部卒業写真集に、鮮明な遺構写真が掲載されていることを、2020年8月にご教示いただいた。そこで小論では、この新たに確認できた写真から読み取れる情報を分析し、あわせて近年の元寇防塁調査研究の動向と成果に関して論じる。

また、附編として、同じく100年前の1920（大正9）年10月に掘り起こされた国史跡西新地区元寇防塁の戦前に撮影された絵葉書・写真を集成し、現状との比較を通してその課題を整理する。

1. 戦前の卒業写真集に写る現大学博物館北側の元寇防塁

図版1・2が、今回新たに確認された1932（昭和7）年の西南学院中学部卒業写真集掲載の現大学博物館北側における元寇防塁遺構である。特に図版1は、前稿（伊藤 2017）紹介写真よりも、さらに遺構細部の特徴を明瞭に確認できる。

掘り起こされた元寇防塁遺構は、周囲を竹垣で囲み、遺構の塁壁本体上部と掘り下げた周囲の法面は芝張りされており、遺構の保護と公開の両側面に充分配慮していた状況が分かる。国史跡西新地区元寇防塁とならんで、元寇防塁遺構の保存整備例としては最古級といえる。また、前稿の写真では不確かであった陸側（南側）壁面が掘り起こされていた状況も、建物前に法面が写っていることで明らかである。

図版1は、背後に現大学博物館建物が写っており、海側（北側）壁面の石積み部分を斜め正面に捉え、北西から南東方向に向いて撮影している。前稿で確認したように、ほとんど加工痕跡の無い平たい円礫石材を使用して、横目地がやや意識して揃えられた5段ほどの石積みが写真中央から右手前にかけて確認できる。そして、今回の写真で新たに明確になった部分としては、写真左奥側（東側）の石積み部分であり、右側（西側）とは明らかに異なって角の目立つより大きめの石材を積み上げていることである。これは、福岡市西区の今津地区の元寇防塁（柳田・西園 2001：31-35頁）で特徴的に確認されたような、防塁築造時の分担区間の違いを反映している可能性がある。これまでの西新地区における元寇防塁調査研究成果では知られていなかった重要な特徴といえる。

図版2は、防塁遺構上で撮影された剣道部の集合記念写真である。図版1と同じく北西から南東方向に向けて撮影しており、石積み最上部の一部のみであるが、竹垣内の植え込み越しに防塁海側（北側）壁面のより正面を捉えている。また、防塁塁壁上で斜め3列に並ぶ剣道部員の様相から、塁壁上部の幅の広さが良く分かる。この遺構の大きさは、前稿で紹介した西南学院卒業生の矢野久雄による長さ約7m・幅3m半という計測値（矢野 1938：23頁）が唯一であ



図版 1 1932年の西南学院中学部卒業写真集掲載の現大学博物館北側の元寇防塁 (1)



図版2 1932年の西南学院中学部卒業写真集掲載の現大学博物館北側の元寇防塁 (2)

るが、居並ぶ剣道部員の状態からも十分に合理的な数値であることが裏づけられる。ちなみに、これまで発掘調査が実施された西新地区の他の元寇防塁では、国史跡西新元寇防塁隣接地は基底幅3.4m（柳田ほか 1970：5頁）、西南学院大学1号館建物建設時の発掘調査で検出された遺構は基底幅3.3m（大塚編 2002、柳田・西園 2001：47頁）である。「幅3m半」という数値が当時の現存上面幅だとすると、やや規模が大きい可能性があることと、遺構発見時にすでに失われていた塁壁上部がかなり高いものであった可能性があることを類推できる。

なお、この1932年の卒業写真集中では、1931年から同年初めに起きた満州事変（九一八事変）・第一次上海事変（一二八事変）と久留米から出兵した「肉弾三勇士」の爆死、「満蒙問題」などについても、卒業生の寄せ書きや写真記事で随所に触れられている。この防塁遺構も戦時下の軍国教育で「活用」され、1945年の大日本帝国とその全体主義体制の敗北崩壊に至るまで西南学院学生・卒業生も侵略戦争先や特攻作戦などで多数戦死した（伊藤 2017・2018・2019）。

2. 最近の元寇防塁調査研究の論点

元寇防塁研究は、近年大きな進展と成果をみせている。2019年には、福岡市教育委員会により、市内各地点のこれまでの元寇防塁における調査成果を総括した報告書（藏富士編 2019）が刊行された。また、東区の九州大学箱崎キャンパス跡地の発掘調査によって、これまで実態が不明確であった箱崎地区における元寇防塁の具体的様相が初めて明らかにされた（福田・森編 2018、三阪・谷編 2019、齋藤編 2020）。

元寇防塁の調査総括報告書では、近年調査が進む西区今津地区の元寇防塁の成果など、これまで詳細が不明であった地点の情報も整理紹介されている。そして、これまでの各地区における特徴の違いの把握を越えて、壁面の石積み・塁壁本体の幅・断面構造の違いにより細分し、元寇防塁全体を2類に統合する

新たな分類案も提示された。Ⅰ類は従来から知られる海側・陸側の両壁面が石積みの例に対して、新たにⅡ類として海側壁面のみ石垣状（擁壁状）に石積みを行うという類型が設定されている（藏富士編 2019：24頁）。

遮断型城郭の一種である元寇防塁は、城壁・塁壁としての機能が最重要である。塁壁本体がある程度良好に保たれている事例が分類を行う上での基準資料とみなされ、塁壁本体の大半が失われて基底部付近のみが残る事例をそこにどのように正確に位置づけていくことができるのかが、今後に残る検討課題である。また、風波の影響を強く受ける沿岸部で軟弱な砂丘上に構築され、多くは中近世～現代に至るまで一貫して石材需要のある市街地に近い場所に立地することから、防塁そのものの崩壊・破壊過程などの研究も改めて必要とされる。たとえば際立った一例では、日本国内での研究例はまだないが、ブリテン島などのおもに青銅器・鉄器時代に特徴的にみられる丘城（hillfort）等の土塁と空堀の遺跡形成過程解明を目的として、実験的な復元土塁・空堀（experimental earthwork）を築造し、その長期的な経年崩壊・埋没過程を観察記録する実験考古学研究（Bell *et al.* eds. 1996）が続けられている。

日本国内での先行採用例が確認できない石塁または石積みによる遮断型城郭としての元寇防塁の技術的系譜に関して、筆者の前稿では、同時代の国内の築地塀版築技術、福島県の阿津賀志山^{あつかしやま}防塁などの長距離におよぶ遮断型の城郭技術、堞・女垣（ひめがき）などの中国・朝鮮半島の城郭城壁技術が、比較検討課題であることを指摘した（伊藤 2017：124-125頁）。

その後、東区の九州大学箱崎キャンパス内における発掘調査により、塁壁本体のほとんどは失われていたが、少なくとも基底部の海側壁面のみ擁壁状の石積みという箱崎地区における元寇防塁の具体的な姿が、多面的な分析とともに初めて詳細に明らかにされた（福田・森編 2018, 三阪・谷編 2019, 齋藤編 2020）。

なかでも興味深い調査成果として、箱崎地区の元寇防塁は、防塁の塁壁本体背後の陸側に、幅9～14m・深さ1mの広く平らな底面で緩やかな法面をもつ「溝状遺構」・「大溝」が並走している状況が確認された。報告中では、この溝

状遺構・大溝の防御施設の機能と「空堀」とする見解も一部示されている（宮本 2019：156頁，宮本 2020，岩永 2020）。また，先述した阿津賀志山防塁の多重土塁・空堀とこの箱崎地区の元寇防塁との対比も行われている（岩永 2020：170-173頁）。

福島県国見町の阿津賀志山防塁は，主として3重の土塁の間に2条の空堀を挟む構造で，東北地方の古代城柵や防御性集落からの技術的系譜や関連性が想定されている（木本編 1994：67-71頁）。古代末期の防御性集落も，北日本各地で近年類例が増加している（三浦・小口・斉藤編 2006）。また，同時期の大規模遺跡調査例では，秋田県横手市大鳥井山遺跡（島田・信太 2009）や福島県会津坂下町の陣が峯城（吉田ほか 2005・2008）も，多重の土塁・空堀に囲まれた城郭であることが確認されている。阿津賀志山防塁の技術は，地域的・歴史的に無理なく先行系譜をたどることが可能であるが，同時期の国内他地域では類例は見つかっていない。

元寇防塁を構築した鎌倉幕府自体も，中世都市鎌倉の防御に遮断型城郭に共通する構想を持っていたことが従来から指摘されている。鎌倉の三方を囲む神奈川県鎌倉市の山稜部各所で，平場・切岸・堀切・土塁などの遺構が確認されている（鈴木編 2001）¹⁾。なかでも，西方からの攻撃に備えた拠点的な施設とみなされる極楽寺坂地区（鎌倉・東国における律宗の拠点である極楽寺周辺）の尾根上の「一升榭」地点は，四方を土塁で囲み，尾根続きを堀切で遮断する構造で，出土遺物から13世紀代と考えられている（前掲同：30-35頁）。しかし，北日本のような大規模な土塁・空堀を多重に並走させるような例や，元寇防塁のような大規模な石積みのみでなく石積み自体を防御施設に採用した例も見つかっていない。

ただし，戦国期になると，国内各所で多重の土塁・空堀による遮断型城郭が知られる。大規模な例では山梨県韭崎市の能見城防塁（山下編 1998）が代表的である。また，より小規模で部分的な例では，佐賀県鳥栖市の勝尾城筑紫氏遺跡の一部を構成する葛籠城や惣構の長大で多重の土塁・空堀線（石橋編 1999，島編 2017）や，少弐氏の拠点である佐賀県神埼市の勢福寺城南東尾根遺構群

(宮武編 2013:206-207頁) など、国内各地で類例を散見できる。

海外では、たとえば古代ローマ帝国の国境防御施設は、スコットランドのアントニヌスの長城 Antonine Wall (Robertson 1990) やドイツ北西部のリーメス Limes (Baatz 2000) も、空堀を挟んで複数の土塁・柵列や軍道を並走させる構造である。

これら、国・地域・時期を異にする遮断型城郭であるが、特に空堀・堀切部分については、いずれも断面形が深い逆台形・V字形などの急角度の法面で、幅の狭い底面をもち、空堀のさらに内側に土塁を有することでほぼ共通する²⁾。

なお、長年議論となっている同時代史料における防塁後方の「裏加佐」の解釈について、「石積み遺構の後背砂地にサカキを植えて生垣状を成し、より嵩を増した」(齋藤・三阪・福永 2020:187頁) 状態を指す可能性が指摘されている。確かに中近世城郭の塁壁外面などに逆茂木などの障害物を設ける例が広く知られており、重要な指摘である。しかし、この場合、防塁線内側への攻撃側の侵入に対する妨げとなるのみでなく、塁壁内側の守備側も大幅に行動や視界が制約される構造となり、城郭としてはあまり他に例をみない構造となる問題が残る。

「大溝」が防塁機能時に人工的な掘削を伴い利用されていたことは調査成果により明らかである。しかし、石積み塁壁本体と同様に城郭の空堀としての性格を備えていたかどうかについては、大溝の浅く平らで幅広の底面に対して緩やかな法面であることが留意される。また大溝のさらに内陸側に並走して防塁塁壁本体と同等かそれ以上の高さの土塁や石塁などの遮断施設が確認されていない点も、防御施設の重要機能に関わる課題として残る。たとえば、防塁塁壁本体構築に関連する土砂採取場所のほかに、防塁背後の兵員の通路のような用途も考えられる。また、土層の調査結果でも、自然層の洪水層とその上層の砂丘層・攪乱層がより陸側から大溝付近に向かって緩やかに下る土層図(下山・三阪・市原 2019:132頁図1)も示されている。これは発達した砂丘に対応するように、未発達な砂丘後背凹地(低地・湿地)的な自然の微地形があり、その砂丘寄りのもっとも深さのある部分を「大溝」として二次的に再利用した可能性もあると考えられる。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、学校法人西南学院常任幹事吉田雅俊氏、西南学院史資料センター高松千博氏、西南学院大学博物館下園知弥氏・鬼束芽依氏・山本恵梨氏より、資料の調査にあたってご教示とご協力を賜りました。末筆ながら、お名前を記して御礼を申し上げます。

註

- 1) 元寇防塁欠落区間にあたる西区愛宕山（鷲尾山）の北側尾根（愛宕神社東北下側の「愛宕の森探索路」）に、海側（北側）が高さ最大数 m の切岸状で尾根上が幅数 m の平場状になった東西方向に 150m ほど続く人工的地形が見られる。鎌倉の山稜部で見られる人為地形・城郭遺構に良く類似する。しかし、その東側半分以上はすぐ北側の斜面を掘削造成した住宅地と道路に面しているため、これらがいつの時期に形成されたものかは不明である。
 なお、鎌倉の山稜部の各地点における人為地形・城郭遺構に関しては、神奈川県教育委員会の報告（鈴木編 2001）のほかに、以下の報告例が代表的である。
 赤星直忠ほか 1979『逗子市名越遺跡：中世の切通・城郭・葬送遺跡』、逗子市教育委員会（神奈川）
 大竹正芳編 2001『東勝寺跡・妙本寺周辺現状測量調査報告書』、財団法人鎌倉風致保存会（神奈川）
 玉林美男ほか 1996『化粧坂周辺詳細分布調査報告書：国指定史跡化粧坂・日野俊基墓周辺の鎌倉街道上ノ道に係わる街道・城郭遺構等の詳細分布調査報告書』、鎌倉市教育委員会（神奈川）
 玉林美男ほか 1999『大仏切通周辺詳細分布調査報告書：国指定史跡「大仏切通」に関わる古道および城郭遺構等の調査報告』、鎌倉市教育委員会（神奈川）
 玉林美男ほか 2001『切通周辺詳細分布調査報告書：「朝夷奈切通（国指定史跡）」「極楽寺切通」「杉本城跡・釈迦堂切通」「材木座地区」周辺における古道および城郭遺構等の調査報告』、鎌倉市教育委員会（神奈川）
- 2) 古代末の北日本の防御性集落には、青森県青森市高屋敷館遺跡に代表されるような集落を取り巻く空堀の外側に土塁を伴う例も知られる。弥生時代の環濠集落の環濠外側土塁をめぐる議論（久世 2002）と同様に、高屋敷館遺跡の外側土塁についても防御機能について疑問視する見解もあり（三浦・小口・斉藤編 2008）、むしろ捕虜収容所的な機能に関わるものとする解釈（岡本 1998）もある。こうした外側土塁の防御上の有効性については、千田嘉博が整理するように、集落内側と外側土塁頂部との比高差が重要といえる（千田 2010）。実際に、関東地方などの戦国期城郭では、しばしば曲輪（郭）を取り巻く空堀（横堀）のさらに外側低位に土塁や帯曲輪を伴う例が多く知られる。海外でも、たとえばアオテアロア（ニュージーランド）北島のマオリ民族の城郭 Pa でも同様の構造の例が多く見られ、その最末期にはイギリス軍との銃砲戦に対応するために塹壕と胸壁（掩体）に類似した独自の構造にまで改良発展させている（Best 1927）。

引用・参考文献

- 石橋新次編 1999『勝尾城下町遺跡』, 鳥栖市文化財調査報告書第57集, 鳥栖市教育委員会(佐賀)
- 伊藤慎二 2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構: 大学博物館北側の元寇防塁」, 『国際文化論集』第31巻第2号: 121-144頁, 西南学院大学学術研究所(福岡)
- 伊藤慎二 2018「西南学院大学構内の戦争遺跡: 戦時下の松脂採取痕跡を中心に」, 『国際文化論集』第32巻第2号: 141-181頁, 西南学院大学学術研究所(福岡)
- 伊藤慎二 2019「日常風景のなかの戦争の痕跡: 西南学院の戦争遺跡を歩く・記憶する」, 『戦争を歩く・戦争を記憶する』: 199-226頁, 朝日出版社(東京)
- 岩永省三 2020「箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論」, 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡: HZK1802・1803・1805・1902地点』: 164-174頁, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 大塚紀宜編 2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集, 福岡市教育委員会(福岡)
- 岡本孝之 1998「外土塁環壕集落の性格」, 『異貌』第16号, 共同体研究会(東京)
- 木本元治編 1994『国指定史跡 阿津賀志山防塁保存管理計画報告書』, 国見町文化財調査報告書第9集, 国見町教育委員会(福岡)
- 久世辰男 2002『集落遺構からみた南関東の弥生社会』, 六一書房(東京)
- 藏富士寛編 2019『元寇防塁: 調査総括報告書』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1382集, 福岡市教育委員会(福岡)
- 齋藤瑞穂編 2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡: HZK1802・1803・1805・1902地点』, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 齋藤瑞穂・三阪一徳・福永将大 2020「Ⅶ箱崎砂丘東端の元寇防塁をめぐる二・三の問題」, 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡: HZK1802・1803・1805・1902地点』: 175-195頁, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 島孝寿編 2017『勝尾城筑紫氏遺跡: 勝尾城筑紫氏遺跡確認調査報告書(3)』, 鳥栖市文化財調査報告書第88集, 鳥栖市教育委員会(佐賀)
- 島田祐悦・信太正樹 2009『大鳥井山遺跡: 第9次・第10次・第11次調査』, 横手市文化財調査報告第12集, 横手市教育委員会(秋田)
- 下山正一・三阪一徳・市原季彦 2019「2. HZK1802地点における土層の概要」, 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡: HZK1701・1702・1704・1705・1706地点付 HZK1802/1803地点概要報告』: 131-133頁, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 鈴木次郎編 2001『〈古都鎌倉〉を取り巻く山稜部の調査』, 神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・財団法人かながわ考古学財団(神奈川)

- 千田嘉博 2010 「城郭と戦争の考古学」, 『史林』第93巻第1号: 6-35頁, 史学研究会(京都)
- 福田正宏・森貴教編 2018 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡: HZK1601・1603・1604 地点』, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編 2006 『北の防御性集落と激動の時代』, 同成社(東京)
- 三阪一徳・谷直子編 2019 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡: HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点 付 HZK1802/1803 地点概要報告』, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 宮武正登編 2013 『佐賀県の中近世城館 第2集各節編1(三養基・神埼・佐賀地区)』(佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ), 佐賀県文化財調査報告書第201集, 佐賀県教育委員会(佐賀)
- 宮本一夫 2019 「X 元寇防塁遺跡調査の成果と課題」, 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡: HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点 付 HZK1802/1803 地点概要報告』: 153-164頁, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 宮本一夫 2020 「Ⅷ 調査のまとめ」, 『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡: HZK1802・1803・1805・1902 地点』: 196-199頁, 九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集, 九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 柳田純孝ほか 1970 『福岡市西新元寇防塁発掘調査概報: 鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の第三次(昭和44年度)調査』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集, 福岡市教育委員会(福岡)
- 柳田純孝・西園禮三 2001 『元寇と博多: 写真で読む蒙古襲来』, 西日本新聞社(福岡)
- 矢野久雄 1938 「元寇防塁研究」, 『学友会雑誌』第20号: 22-26頁, 西南学院学友会(福岡)
- 山下孝司編 1998 『能見城跡: 送電線鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 蕪崎市教育委員会・蕪崎市遺跡調査会・東京電力株式会社山梨支店(山梨)
- 吉田博行ほか 2005・2008 『陣が峯城跡: 町内遺跡(陣が峯城跡)範囲内容確認調査報告書』1・2, 会津坂下町文化財調査報告書第58・60集, 会津坂下町教育委員会(福島)
- Baatz, Dietwulf 2000 *Der Römische Limes. Archäologische Ausflüge Zwischen Rhein und Donau*, 4. völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage, Mann Verlag (Berlin)
- Bell, M., P. J. Fowler and S. W. Hillson eds. 1996 *The Experimental Earthwork Project 1960-1992*, Council for British Archaeology (Halifax)
- Best, Elsdon 1927 (1975) *The Pa Maori*, Dominion Museum Bulletin No.6, A. R. Shearer Government Printer (Wellington)
- Robertson, Anne S. 1990 *The Antonine Wall: A Handbook to the Surviving Remains*, revised and edited by Lawrence Keppie, Glasgow Archaeological Society (Glasgow)

附 戦前の絵葉書に写る西新元寇防塁

凡 例

1. これらの絵葉書および立体写真（資料1～10・参考資料1）は、筆者（伊藤慎二）が古書市場等で個人的に収集したものである。また、比較参照用に、現在知られる主要な戦前の西新地区元寇防塁撮影写真を参考資料2～5としてあわせて掲載した。
2. 製作年代が記載された資料は無いが、陸軍西部軍司令部の検閲済年月日記載や旧漢字・旧仮名遣い・右書き使用、および背景状況などから総合的に戦前製作品と判断した。
3. 各絵葉書上の文言は、右書き・縦書きを左書きに改めて、原則として旧漢字・旧仮名遣いのまま翻刻した。
4. 各資料番号の右側には、原資料の彩色・白黒の違い、原資料の長軸×短軸寸法（単位：mm）、推定撮影方位（※解説参照）を、それぞれ順に記載した。
5. これらの絵葉書と立体写真は、西南学院大学博物館に寄贈し、公開活用供する予定である。

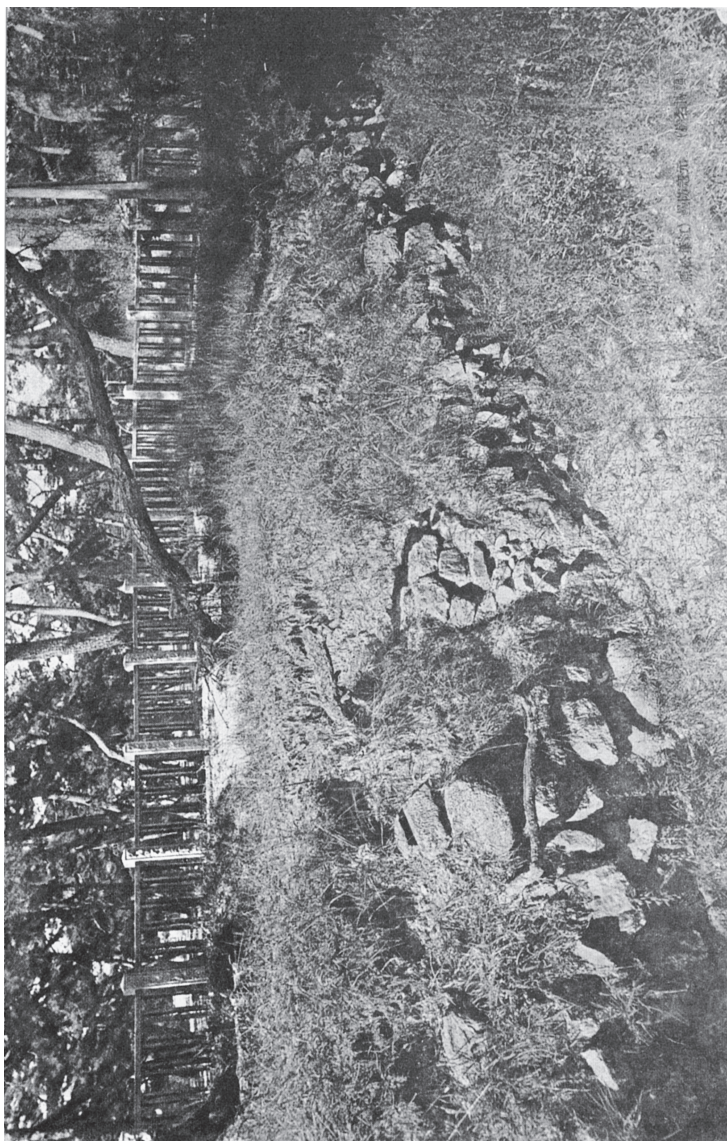


(所名多様)

元寇防塁

資料1 (彩色写真) 139×90mm 南西→北東

表面：「(博多名所) 元寇防塁」
裏面：特に記載無し



資料2 (彩色写真) 139×88mm 南西→北東

表面：写真内「(福博名勝) 元寇防壘(紅葉松原)」

裏面：特に記載無し(外袋に「西部軍司令部許可済」印・「ガクブチ エハガキ 大崎周水堂」)



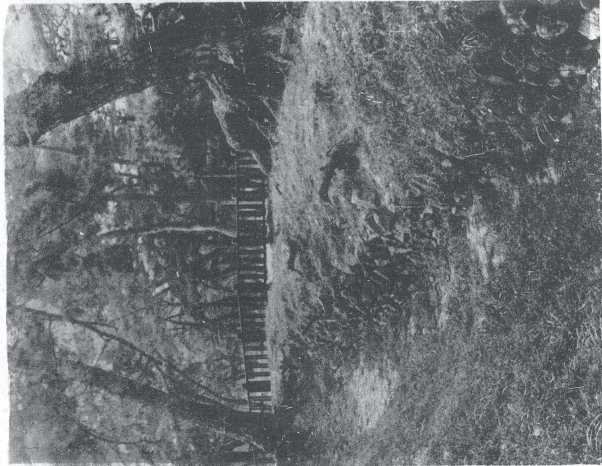
資料3 (白黒写真) 141×92mm 南西→北東

表面：「A VIEW OF HAKATA AND FUKUOKA」〔福博名勝〕元寇防塁（紅葉松原）
裏面：特に記載無し



今津の元寇防壘跡

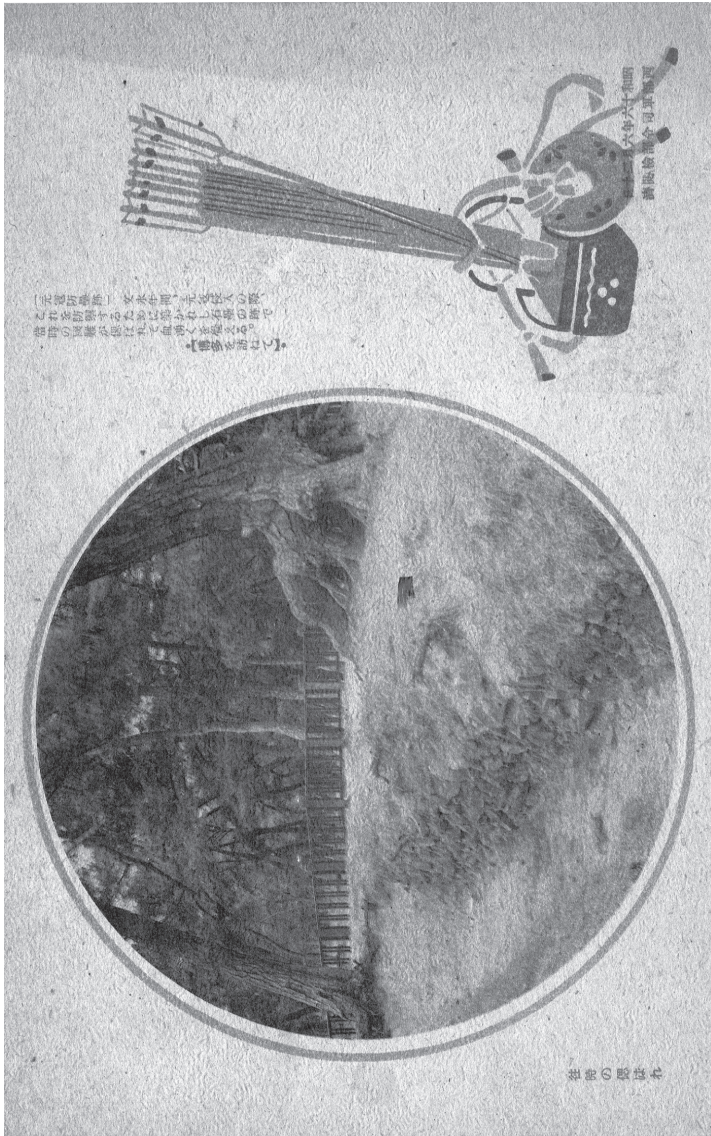
昭和16年11月12日 西部軍司令部許可済



百道の元寇防壘跡

資料4 (白黒写真) 140×91mm 南東→北西(※西新)

表面：「百道の元寇防壘跡」「今津の元寇防壘跡」「昭和16年11月12日 西部軍司令部許可済」
裏面：「福岡市観光協會發行」



資料5 (白黒写真+彩色画) 141×89mm 南東→北西

表面：別記

裏面：「撃ちて止まむ」「師團印刷」

資料5 表面：

「元寇防壘跡」 文永年間，元寇侵入の際，
これを防禦するために築かれし石壘の跡で
當時の國難が偲ばれて血湧くを覺える。

・【博多を訪ねて】・」

「昭和十六年六月二十日 西部軍司令部検閲済」

「往時の偲ばれ」

資料6 表面：「元寇防壘」

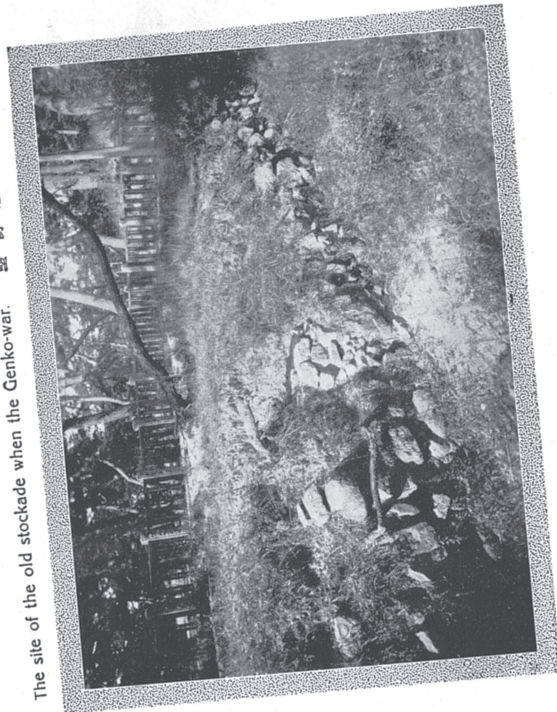
「百道の松原から掘り出された，元寇防壘は見なざった
な，そげん面白いもんぢゃなかばってん，今から六七百年
前の大昔，蒙古軍拾萬が博多湾に攻めて来た時イ防いだ石
の壘，糸島郡の今津から多々良濱邊まで六里の間イ築かれ
た防壘で日本な國難を助かっとなるゲナと云ふこだすバイ」

「(福博名所) 元寇防壘 Tha site of the old stockade when the Genko-war」

元 寇 防 塁

百道の松原の中から掘り出された、元寇防塁は見なごつた
な、そげん面白イもんぢやなはつてん、今から六七百年
前の大昔、蒙古軍拾萬が博多灣に攻めて來た時イ防いだ石
の塁、糸島郡の今津から多々羅濱邊まで六里の間イ築かれ
た防塁で日本な國難を助かつてるゲナと云ふことばすバイ

元 寇 防 塁 (所名傳稱)

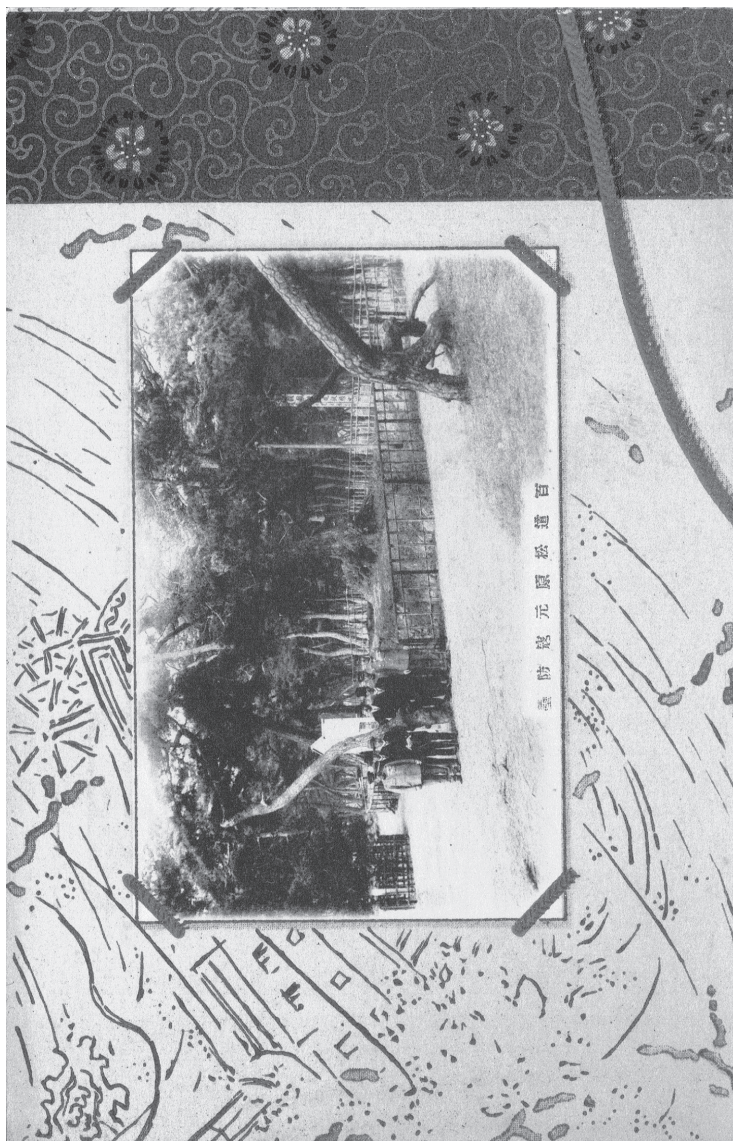


The site of the old stockade when the Genko-war.

資料6 (白黒写真) 142×91mm 南西→北東

表面：別記

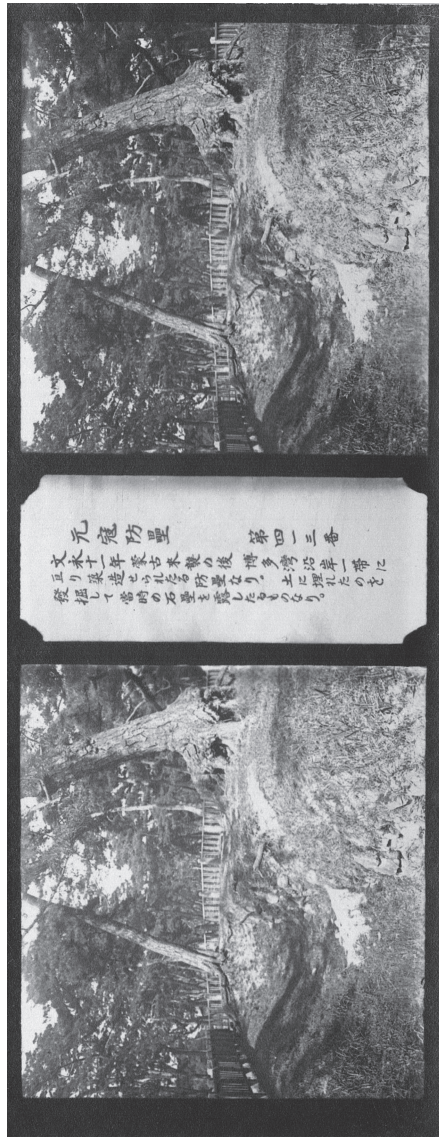
裏面：「SEIKYOKUDO KYOTO」



資料7 (白黒写真+彩色画) 141×91mm 北東→南西

表面：「百道松原元寇防壘」

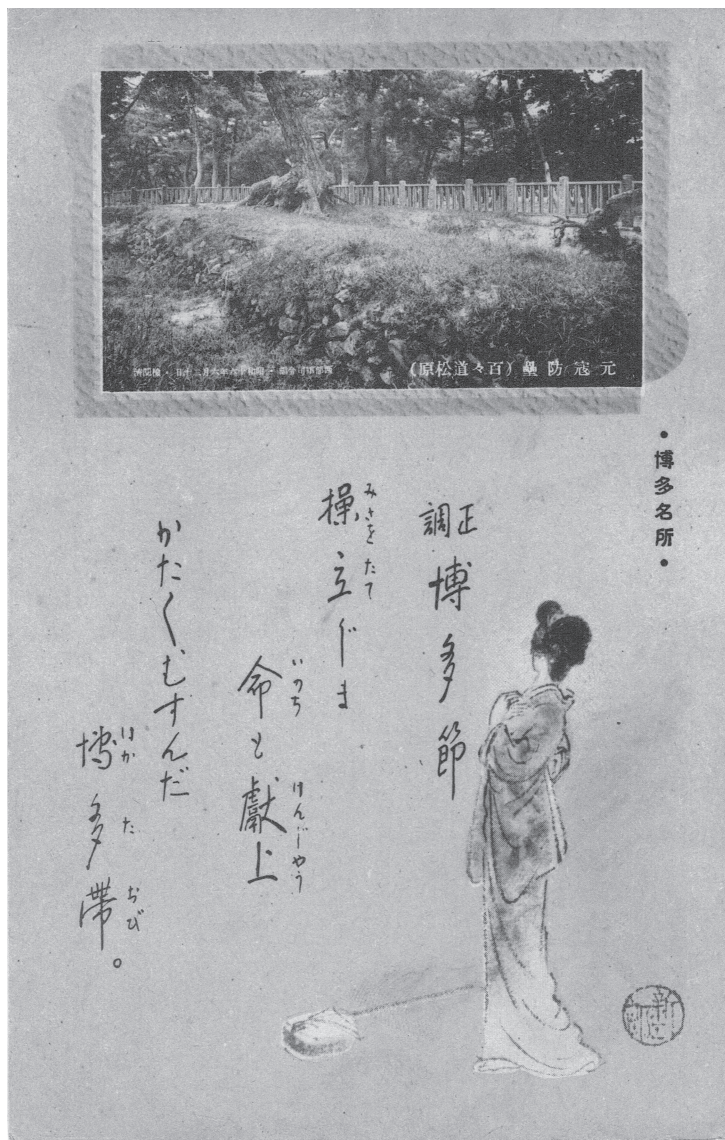
裏面：「元寇記念會發行」



資料8 (白黒写真) 108×43mm ※立体写真 東→西

表面：「元寇防塁 第四一三番」「文永十一年蒙古来襲の後、博多湾沿岸一帯に亘り築造せられたる防塁なり。土に埋もれたのを発掘して當時の石壘を露したるものなり。」

裏面：特に記載無し



資料9 (白黒写真+彩色画) 141×89mm 南東→北西

表面：別記

裏面：「博多大崎周水堂製」

資料9表面：写真内「元寇防塁（百々道松原） 西部軍司令部・昭和十六年六月二十日 検閲済」

「・博多名所・」

「正調 博多節

みさをたて
操立じま

いのち けんじょう
命も献上

かたくむすんだ

はかた おび
博多帯。」

資料10表面：「元寇防塁の趾（博多）」

「観光客「六百年の昔蒙古軍十万が襲来したのは

此辺一帯ですかネ

案内人「さうで御座いますタイ、此處イ掘り出されとる石垣が

元寇防塁と言ひましてなア、之れで元軍ば防いだ

遺蹟ぢやと云うことだすやなア

観光客「九州男児は昔も今も偉い

ものですネ是位ひの防塁で大國難を

喰止めた位ひだから定めて敵軍を

散々にやっつけた事でせうネ

案内人「あなたの言ひなざる

通り茶ッ茶苦茶羅イやっ付けられたケン

元軍も余程懲りたと見へましてネ

日本にやモウコンと言ひましたゲナ」



資料10 (白黒写真+単色画) 141×90mm 南東→北西

表面：別記

裏面：特に記載無し



参考資料 1 大正五年陸軍特別大演習記念絵葉書 142×92mm

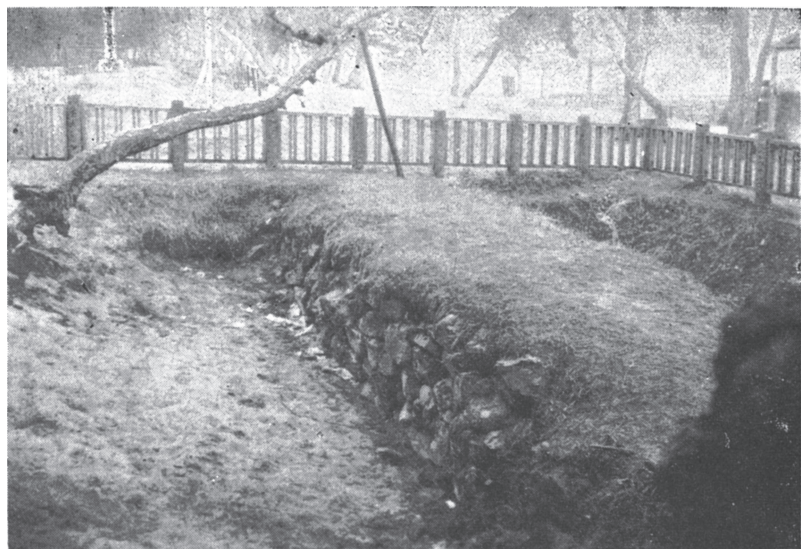


参考資料2 西新小学校児童による西新元寇防壘の掘り起こし・1920（大正9）年10月30日撮影 出典：（福岡市立歴史資料館編 1974：3頁）





参考資料4 『元寇史蹟案内』掲載写真 出典：(元寇記念会編 1931)



参考資料5 『元寇史蹟（地之巻）』掲載写真 出典：(川上 1941)

解 説

a. 絵葉書の題材としての元寇防塁

国史跡西新地区元寇防塁（以下、西新元寇防塁と略す）は、今から100年前の1920（大正9）年10月に、「教育勅語下賜」30周年を記念して、西新尋常小学校の児童らの手により掘り起こされ（川上 1941：74頁、参考資料2）、今回の絵葉書に見るように福岡市内の観光名所の一つともなった。ただし、絵葉書の題材対象となる福岡市周辺の観光名所としては、たとえば同じ元寇関連の東区筥崎宮や博多区亀山上皇・日蓮上人銅像に比べると、あまり頻繁ではなかったようである。また、今回は取り上げなかったが、市内の元寇防塁遺構では、ほかに福岡市西区今津の元寇防塁も戦前の絵葉書の題材となった例が存在するが、西新元寇防塁よりもさらに少ない。

なお、西新元寇防塁の戦前の所在地名は、西新町^{ももち}百道（百々道）松原・紅葉松原とするのが一般的であったようである。

b. 取り上げられ方

絵葉書での取り上げられ方にもいくつかの特徴がある。遺構の特徴や全体像に焦点を当てた例（資料1・2・3）のほかに、博多節の歌詞や博多方言での軽妙な会話風の解説を伴う風土情緒を印象づける例（資料6・9・10）、県内の元寇関連史跡の保存顕彰に関わった元寇記念会関係者とみられる軍人や要職者の集合記念写真を兼ねた例（資料7）などがみられる。

また、1941（昭和16）年の陸軍西部軍司令部検閲が明記された例も目立ち（資料4・5・9）、日中戦争に続き日米開戦へと向かう戦時下で、軍事統制の強化が進む時代世相も読み取れる。ただし、元寇防塁遺跡の歴史的・軍事的性格は、全体主義・軍国主義体制下の排外的な戦意高揚・国威宣揚の記念物として本質的に「活用」されやすいものであった。すでに1916（大正5）年の陸軍特別大演習記念絵葉書（参考資料1）でも蒙古襲来絵詞の防塁場面が象徴的に採用されている。また資料5は、おそらく軍関連発行の絵葉書と考えられる。

c. 撮影年代

これらの絵葉書に写る元寇防塁の撮影年代は、明確に特定することが困難で

あるが、西部軍司令部検閲年月日から1941（昭和16）年頃のものを含む。さらに、遺構を保護するための周囲の柵囲いに着目すると、竹垣状の柵と玉垣状の柵の2種類が存在することを確認できる。そして、1941年の西部軍司令部検閲が明記された絵葉書に写る柵囲いは、すべて玉垣状である。このことから、おそらく、資料7や参考資料3・4に見られる竹垣状の柵が1920（大正9）年以降の公開初期の状態で、後になって玉垣状の柵に改築されたとみられる。その改築時期は、1931（昭和6）年3月の国史蹟指定（福岡市教育委員会編 1978）頃の可能性がある。

ちなみに、資料7の左側に、防塁遺構の竹垣状の保護柵とは別の小規模な竹垣状の柵に囲まれた樹木が写っている。これは、現在も西新元寇防塁遺構の南側に接して残る戦前の皇族訪問時の植樹と記念碑の画と考えられる。現在も現地に残る記念碑は3本あり、各銘文から1920・1923・1929（大正9・大正12・昭和4）年にそれぞれ設置されたことが分かる⁹⁾。このことから、資料7はおそらく1920年～1931年の間に撮影されたことが推定できる。

また、防塁遺構保護柵のすぐ北側に、「護國神社建設豫定（地）」と書かれたかなり大きな標柱が写る例（資料3中央左上、資料7右側、参考資料3中央左側）がある。これは、1943（昭和18）年に福岡市中央区六本松の現在地に福岡縣護國神社が建設される以前に、建設予定候補地の一つが現在の西南学院大学体育館付近にあたるこの西新元寇防塁遺構の北側隣接地であったことを示している。そして、この建設予定地標柱は、竹垣状の柵の段階と玉垣状の柵の段階の両方の絵葉書で確認できるが、撮影角度から判断して玉垣状の柵の段階の途中で撤去されたようである。このことから、たとえば資料1は1931年～1943年、資料9は西部軍司令部検閲年月日とあわせて1931年～1941年に撮影された可能性が高いと考えられる。

d. 撮影方位

絵葉書に写る防塁遺構の撮影箇所・撮影方位の特定は、戦後75年を経て遺構と周囲の景観が大きく変化しているため容易ではない。たとえば、戦前の絵葉書に特徴的に写る防塁上の大きな松は、すでに現在は消滅して跡形もない。し

かし、防塁遺構の周囲に写る微地形などに着目すると、遺構保護のための柵囲い傍らの隣接地が小高く盛り上がっている例が目立つ。資料1・2・3・6は、小高い盛り上がり地形の頂部に生えた草むらが写真右端奥の玉垣後方に明瞭に見える。参考資料5では、写真左上の玉垣後方に同様の地形と1931（昭和6）年10月建設の「史蹟 元寇防塁」碑が確認できる。これは、現在元寇神社社殿（小祠）が建つ旧砂丘地形残存部の微高地とみられる。そして、この微高地や松の位置形状などから、各絵葉書に写る遺構の撮影方位を推定できる。その結果、ほとんどが南東や南西など防塁の陸側（南側）壁面の石積みを撮影したものと判断される。戦前の西新元寇防塁海側（北側）壁面を写したと考えられる写真は非常にまれで、参考資料5程度である。

e. 現状との対比

1920（大正9）年に掘り起こされた西新元寇防塁遺構は、1931（昭和6）年の国史蹟指定を経て、戦前の段階でも保護管理が行われていた。しかし、戦前の絵葉書からは、松の根や浸食などで、石積み上部が部分崩落している状況も確認できる。たとえば、資料2・6・8の中央手前には、防塁の陸側（南側）壁面石積み上部が一部崩落し、直下にその白い土砂が堆積している。ただし、戦前の異なる時期に撮影された防塁遺構の写真では、石積み同一部分を容易に識別できることから、遺構保存公開後も戦前は大幅な積直しなどの改修を行っていないことが推察できる。

西新元寇防塁遺構の学術的な調査と保存整備は、アジア太平洋戦争後まで待たなくてはならなかった。そして、1970（昭和45）年1月～3月に福岡市教育委員会によって初めて考古学的な発掘調査と保存整備事業が行われた。ところが、調査の結果、現在保存公開されている西新元寇防塁遺構については、「現在どれ程旧状をとどめているか疑わしい」ことと、その原因が「昭和36年（筆者註：1961年）の保存工事の際、一部石を積みなおしている」（柳田ほか1970：7頁）ことが指摘されている。ちなみに、同じ1961年に元寇神社旧社殿が保存遺構のすぐ東側の現在地に建設されており²⁾、その関連性や影響も考慮される。



図1 現在の西新元寇防塁と推定同一箇所と比較1 南西→北東

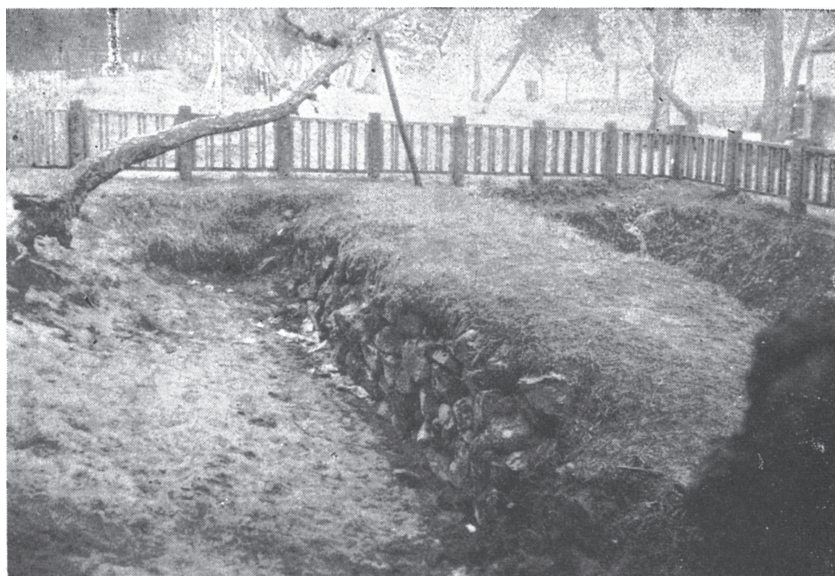


図2 現在の西新元寇防塁と推定同一箇所と比較2 北西→南東

今回紹介した絵葉書には、戦前の時点での石積み細部がかなり明瞭に写された例もある。そこで、先ほどの撮影方向の推定を基に改めて現状との比較を行ったのが、図1・2である。戦前の絵葉書に写る西新元寇防塁遺構は、最初の掘り起こし時点で築造当初の塁壁上部はすでにかなり失われていたとみられるばかりでなく、残存部の壁面上部の石積みもかなり崩落が進み、粘土や砂などの塁壁本体内部が露出していた状況を明瞭に確認できる。しかし、現在の西新元寇防塁遺構は、壁面最上部まで完全な石積みである。さらに、資料1・2に写る石積みを、撮影方位からほぼ同一箇所付近と考えられる現状部分と現地と比較検証を行ったが、明らかに各石材の積み方が異なっており、完全に合致する石積み部分は確認できなかった(図1)。なお、海側(北側)壁面については、今回確認できた戦前の写真がかなり斜め方向から石積みを写した参考資料5のみのため、詳細な比較検証は困難である。しかし、同一箇所と考えられる現在の防塁北東部付近の海側(北側)壁面石積みは、陸側(南側)壁面に比べて、かなり不揃いの凹凸が目立つ面であることが特徴的で、参考資料5の石積みの特徴とある程度類似することが注意される(図2)³⁾。

以上の検証結果から、現状の西新元寇防塁遺構の特に陸側(南側)壁面石積みは、おそらく1961(昭和36)年の保存工事の際に大部分が一度解体されたとみられる。各石材は原位置とはほぼ無関係に美観的に面を整えることを主眼に積み直され、新たな石材もその際に多数補充されたことが推察される。また、残存塁壁本体の上面もその際にやや削平された印象を受ける。

つまり、現在保存公開されている国史跡西新元寇防塁遺構の特に陸側(南側)壁面の石積みは、戦前に保存公開されていた時の状態をほとんどどめていないとみなされる。

註

1) 現在の西新元寇防塁遺構南側に隣接して東西方向1列にならぶ皇族訪問・植樹記念碑の銘文は、西から東の順で下記の通りである。

西：表「良子女王殿下御手植公孫樹」・裏「大正十二年五月十四日」、中：表「久邇宮殿下

御手植樟」・裏「大正九年十二月二日」、東：表「梨本宮守正王殿下 閑院宮春仁王殿下 臺臨記念縦」・裏「昭和四年十月二十日」

- 2) 福岡市早良区紅葉八幡宮ホームページ「行事の報告」「元寇神社 仮殿遷座祭が斉行されました。」公開：2011年10月1日
- 3) 現在の西新元寇防塁遺構では、そのほかに海側（北側）壁面の中央西寄りにもう一箇所短区間のみであるが、不揃いで凹凸の目立つ面の石積み部分がある。

引用・参考文献

- 川上市太郎 1941『元寇史蹟（地之巻）』、福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第14輯、福岡県（福岡）〔復刻：1979 福岡県文化財資料集刊行会〕
- 弘安役六百五十年記念元寇記念会編 1931『元寇史蹟案内』、秀巧社（福岡）
- 福岡市教育委員会編 1978『史跡元寇防塁 保存管理計画策定報告書』、福岡市教育委員会（福岡）
- 福岡市立歴史資料館編 1974『元寇七百年展目録』、福岡市立歴史資料館（福岡）
- 柳田純孝ほか 1970『福岡市西新元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の第三次（昭和44年度）調査』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集、福岡市教育委員会（福岡）
- 柳田純孝・西園禮三 2001『元寇と博多：写真で読む蒙古襲来』、西日本新聞社（福岡）